

平成 26 年度 海外臨床薬学研修報告書

「アメリカの薬剤師が尊敬される理由」

研修期間：平成 27 年 2 月 21 日～平成 27 年 3 月 8 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

1 期に病院実習、2 期に薬局実習を終えた。どちらも、とても有意義で充実した実習をさせていただいた。病院実習では、緩和ケアチーム、NST チーム、感染チームなど専門分野に分かれたチーム医療に参加していたり、患者さんのベッドサイドに頻繁に通いコミュニケーションをとったりする薬剤師の姿を見ることができた。想像以上に幅広い薬剤師の役割を知り、やりがいを感じた。しかし、チーム医療でもやはり医師が主体であり、はじまったばかりの病棟薬剤師は病棟で十分なデスクもないような状況であった。薬局実習では、患者さんのコンプライアンスに合わせて一包化・粉碎したり、在宅に積極的に取り組んだりと地域の方々の健康に強く貢献していた。しかし、混雑しておりひとりひとりの患者さんと会話できる時間が短かったり、患者さんが次に来局されるまでに薬歴がかけなかったりや忙しさにより患者さんへのサポートが十分でないように感じた。このように、薬剤師にやりがいを感じた一方で、まだまだ多くのことができるのではないかと感じた。アメリカの薬剤師は、職能が広く、かつ専門性が高く、患者さんから尊敬され、ほかの医療従事者から強く信頼されていると聞いたことがあった。具体的にどのような役割があるのか、どのように患者さんやほかの医療従事者とかわっているのか、どうして尊敬されるような地位にあるのかを実際にみてみたいと思い、この研修に参加した。

今回のアリゾナ研修では、アリゾナ大学で学生と一緒に講義を受ける機会、教授から直接講義をしていただく機会が多くあった。直接受けた講義は、アメリカの薬学部の教育制度について、アリゾナポイズンコントロールセンターについて、小児の薬物治療について、IPEP について、ナノテクノロジー研究についてなど、さまざまであった。また、アリゾナ大学内にある病院と、アメリカチェーン店である CVS という薬局を見学した。どの経験も、とても有意義で、勉強になるものばかりであった。

その中でも特に印象に残ったのは、やはり、今回の研修参加の目的である病院のシャドウイングである。病院では、医療従事者のチームでの患者さんの回診についていかせていただいた。私が見学した内科チームのメンバーは、医師 2 人、医学部生 2 人、レジデント薬剤師 1 人、薬学部生 1 人であった。薬剤師は、ワーファリン投与患者の INR モニタリング、抗菌薬に対する感受性・耐性チェックなどを行っていた。もちろん、処方権がある、投与量決定権があるなど大きな違いはあるものの、見学させていただいた限り、大まかな役割は同じであった。最も異なっていたのは、薬剤師自身の積極性と他の医療従事者からの信頼である。薬剤師として 1 年目であるレジデントの方が、医師と対等な立場でディスカッションし、意見を述べている姿がみられた。わたしが行った病院実習において、1 年目や 2 年目の先生方は、病棟に上がりず調剤を学んでいたり、先輩薬剤師に同行という形でチーム医療に参加したりしていた。私自身、1 年目で果敢に意見を言える自信がない。そのため、即戦力として活躍している姿、また、1 年目から医師に頼りにされていることに驚いた。それどころか、時には医師が患者さんの前で薬学部生に質問し、きちんと受け答えをしている場面もあった。

このような、他の医療従事者からの信頼や薬剤師自身の積極性はどこから生まれるのだ

ろうか。アメリカでは、プレファーマシー制度を取り入れている。日本では高校を卒業した後すぐに薬学部に入學するが、アメリカでは薬学部ではない学部で2年もしくは4年学んでからさらに薬学部を受験するのだ。薬学部を受験しなくても大卒が得られるにも関わらず、この道を選ぶということは、薬剤師になりたいという明確な意志があるはずだ。現に、一緒に授業を受けさせてもらったが、寝ている学生は誰一人としておらず、手を上げて積極的に質問している学生が多かった。ケースディスカッションの場でも、すべての学生が発言していた。さらに、薬学部のカリキュラム・環境も日本とは異なる。その薬学部4年間の中で、臨床で学ぶ時間は日本より格段に多い。1年生のうちから、早期体験実習のように1日ではなく、一定期間実習を行うことができる。2年、3年生でも実習を行い、4年生ではほとんどの時間臨床現場で学んでいる。大学内においても、実際の現場で働きながら大学教員として働いてみえる先生がとても多い。症例について話合う際も、レジデントという薬剤師1年目、2年目の方たちが参加してくれている。現場の生の声が聞けるのだ。臨床を意識しながら学ぶことができる。また、骨髄ドナーを大学内で募集していた。聞くところによれば、このような募集は頻繁に行われているようだ。少なくとも名城大学では、このような取り組みは大学祭1日目の献血しかない。大学の取り組みとして、国の医療問題に触れる機会が日本より多いと感じた。このように、入学時の意識の高さに加え、それを育てる臨床に近い環境作りがアメリカの薬剤師を生み出している。もちろん、国民皆保険がないことによる医療費の問題から医師に診察してもらえない人が多く薬剤師が頼られる環境にあること、処方権があることなど、制度による違いから生まれる信頼もあるだろう。しかし、頼るに値する医療従事者であるのは、薬剤師・薬学生ひとりひとりの意識の高さも大きいと思う。この意識はまねできることであり、日本でも薬剤師がより社会に貢献できるようになるために負けていてはならない。

このようなアメリカのよい面を知ることができた一方で、日本の方が優れていると感じる場面にも多く出会えた。病院薬剤師は、長い髪を結ばず、長い爪にネイルをし、白衣の前のボタンは閉じられていなかった。薬学生は、回診中に病院の廊下でクラッカーを食べていた。アメリカでは普通のことかもしれないが、日本の病院で行われたら違和感を覚える患者さんが多いだろう。医療従事者としてのきちんとした身だしなみや態度は、患者さんに好印象を与え、信頼を得ることにもつながる。良いコミュニケーションがとれる第一歩として、今の日本の身だしなみを崩してはならない。また、回診中、次の患者さんの病態について廊下で話し合ったり、患者さんの目の前もしくは人通りのある廊下でカルテを記載したり、病室の名前のタグあたりに病態が分かってしまう患者情報が貼られていたり、個人情報漏れてしまうのではないかと思う場面が多々あった。実習でみた日本の病院では、個室で話し合ってから回診を行っており、また、病室の前には名前のタグすら貼られていなかった。アメリカは個人情報保護には厳しいと思っていたため、日本のほうが厳重であることは意外であった。アメリカでも病院によって異なると後から聞いたが、患者さんや家族の気持ちに配慮してプライバシーを守ることも重要だと感じた。さらに、見

学した薬局では、薬剤師は1人で勤務することが普通であり、1日あたり500枚もの処方せんをすべてこなしているそう。調剤助手の方がみえるとは言っても、ひとりで500枚もの監査、疑義紹介、服薬指導を行うことは容易ではない。やはり、お薬の説明は時間がな
いためほぼできず、また、1日1回は患者さんに間違っものが届くという過誤があるそう
だ。また、アメリカでは大抵ボトル調剤であり、一包化や粉碎調剤は行われていない。飲
み忘れの多い患者さんや手のふるえによりヒートから錠剤を取り出すことが難しい患者さ
んには一包化、飲み込む力が弱い患者さんには粉碎調剤など、状態や性格に合わせた調剤
を行うことが当たり前だと思っていたので、かなり驚いた。これが行われなくては、患者
さんのコンプライアンスは格段に下がってしまうだろう。日本の薬局薬剤師も充分忙しい
と思っていたが、処方せん枚数40枚につき薬剤師1人という制度が守られていることで細
かいサポートができていたと感じた。このように、アリゾナ研修によって、日本の良さが
みえたことも大きな収穫であった。

私は将来病院薬剤師として働きたいと考えている。実習で学んだ日本のよい部分と、今
回の海外研修で学んだアメリカのよい部分を頭に入れ、両方を兼ね備えた薬剤師として、
患者さんの治療に貢献できるような薬剤師になりたい。このように貴重な体験をさせてい
ただけたことに本当に感謝しており、この経験を無駄にしないよう、信頼される薬剤師を
目指して精進していきたい。